

2014年12月12～14日；宮城県東松島市&福島県南相馬市での活動報告

～四日市東日本大震災支援の会 第24回派遣～

四日市東日本大震災支援の会 代表 鬼頭浩文(四日市大学教員)

東北の被災地では、仮設住宅での不自由な生活が続き、4回目の厳しい冬を迎えようとしています。われわれが継続的に支援をしている宮城県東松島市では、ようやく災害公営住宅への入居が始まり、集団移転の土地の造成工事が進んで住宅の建築が始まり、一部は完成して引っ越しが始まっています。しかし、引っ越しまで数年が予想されている方もいっしょに、まだまだ復興への道のりは長くなるのが確実視されています。仮設住宅では、高齢者比率が高くなり、孤立などの問題が深刻で、交流の促進など心の支援が必要とされています。支援の会では、再び高校生と大学生による交流イベントを企画しました。

<参加者>

四日市大学学生 8名 教員 1名
四日市看護医療大学学生 4名 教員 2名
三重大学学生 2名
暁中学高等学校生徒 23名 教員 1名
四日市四郷高等学校教員 1名
大池中学校生徒 2名
桑名西高等学校生徒 1名

<行程>

★12月12日(金)
20:00 四日市大学出発
★12月13日(土曜)
8:00 東松島市大曲浜の視察(津波で壊滅的な被害を受けた大曲浜で被災体験を聴きました)
9:30 交流会準備、戸別見守り訪問、大掃除(サボセンと集会所の窓拭き)
12:30 交流会(お茶会、足浴、クリスマスツリー飾り)
16:00 イルミ点灯式&ゴスペル・ライブ ⇒ 仮設住宅集会所で宿泊
★12月14日(日曜)
4:00 バス出発(車内で朝食)
6:30～8:00 南相馬市で語り部の案内で被災地視察
17:30 四日市大学帰着 ⇒ 片付け ⇒ 解散



活動終了後の記念撮影



お茶会・足浴の様子



イルミ点灯式



南相馬市での視察

<12月13日の活動>

2014年12月12日の夜に三重県を大型バスで出発し、翌12月13日の早朝には壊滅的被害を受けた東松島市大曲浜を視察しました。この日の活動は、東松島市矢本運動公園仮設住宅でのサロン活動、大掃除支援、イルミネーション点灯式でした。午前中には、見守りと告知を兼ねて戸別見守り訪問をしました。また、2つの集会所と生活復興支援センターの大掃除手伝いとして、窓ふきをしました。午後には、交流サロン活動として、足浴・お茶会を開催し、クリスマスツリーの飾り付けをしました。お年寄り中心に100名ほどの方に来場いただき、集会所には笑顔が溢れていました。夕方からは、仮設住宅がある矢本運動公園に住人の皆さんが毎年恒例行事となっているイルミネーションの飾り付けをしており、その点灯式を開催しました。点灯式では、協働した団体であるオアシスライフ・ケアの皆さんによるゴスペルのライブがあり、われわれの会のメンバーも大きな声で唄いました。夜には、仮設自治会の会長さんに復興・自立の現状についてお話を聴かせていただき、集会所で宿泊させていただきました。

<12月14日の活動>

翌日の12月14日には、早朝4時の暗いうちに大型バスで東松島市を出発し、途中の福島県南相馬市小高区で被災された語り部の方に被災地を案内していただき、避難生活を送っている現状についてお話を聴かせていただきました。そこでは、東松島市とは異なる多くの問題について知ることになりました。その後は通行が許可されたばかりの国号6号線を南下し、福島第一原子力発電所の近くを通過しました。今でも帰宅を許可されない閑散としている地域を通過し、福島の抱える問題について考えました。今後は、東松島市の支援を継続しつつ、福島の支援活動についても考えていきたいと思えます。語り部の方との情報交換の中では、今後のサロン活動の可能性について議論し、具体的な計画を検討することになりました。

<活動場所・対象者の復興の現状と課題>

東松島市では、集団移転が始まって、仮設住宅のコミュニティに大きな変化が起こっています。今までコミュニティを支えてきた人たちが退去するようになり、空き室が目立つようになってきています。とくに子供のいる世帯の引っ越しが進んでいることも実感しました。今回の活動では、自治会長さんや生活復興支援センターの職員さん、そして交流会でお話を聴かせていただいた住人の皆さんから、仮設住宅のコミュニティ維持が難しくなっている現状、さらには集団移転先の公営住宅などでの新たなコミュニティに関する課題などについて情報を共有させていただきました。

<東松島市での活動の成果>

われわれの活動は、三重から高校生・大学生が出かけ、仮設住宅の皆さんと協働でサロン活動を開催することがベースにあります。そして、季節や復興への行程に合わせて、活動内容を工夫しています。今回助成をいただいた2014年12月の活動では、宮城のグループなどと協働でのクリスマス盛り上げるイベント開催、寒くなって引きこもりがちなお年寄りに集会所に集まっていた生活不活発病の予防にもなる足浴の実施、年末の大掃除に合わせた寒さの厳しい時期の窓ふきなど、メンバーである高校生・大学生らしい季節に合わせた内容になりました。戸別訪問の効果もあり、100名ほどの方に集会所を訪問いただきました。クリスマスのイルミネーション点灯式も、300人ほどが来場し、とても盛り上がりました。寒くなり、引きこもりがちになる仮設住宅において、たくさんの高校生・大学生が「忘れていないぞ」というメッセージを伝え、自立に向けて頑張るエネルギーを与えられたと考えます。

<東松島市での活動で得た認識>

2011年に一斉に仮設住宅での生活をスタートさせた頃は、皆さんが家族や親せき、友人を亡くし、家を流され、すれ違っても挨拶もせず下を向いて歩いていたら聞いています。ようやく数か月たってコミュニティ形成が進み、多くのボランティアの支えもあって、明るい笑顔が仮設住宅にもみられるようになり、その後は仮設住宅の皆さんそれぞれが違ったスピードではありますが、復興へと歩んでいるように見えていました。そして、2014年春になって東松島市では災害公営住宅から集団移転が始まりました。自立のゴールが見えてきたと思いたいのですが、歩みの速度には人によって違いがあり、前に進むどころか止まったままの高齢者のことを聴くたびに、胸が詰まる思いになります。

<今回の活動から見えてきた課題とわれわれの活動ビジョン>

まだまだ支援が必要であることは間違いないのですが、支援団体の活動は減少傾向にあり、イベントが書き込まれた日程表には、空白が目立つようになってきています。今回の活動では、われわれの活動がどうあるべきか、仮設住宅の自治会長さんとも話し合いながら、東松島市への支援について、ある程度の方向性を決めることができました。会の役員会では、活動の人数や頻度を縮小しつつも、集団移転が進んで仮設住宅が全て解消するまで、仮設住宅と集団移転先の両方に寄り添い続けようと申し合わせました。ありがたいことに、この12月の活動ではバスは満席となり、参加を希望していたスタッフが辞退して後方支援にまわるなど、会員数は維持できており、震災から5年目となる来年度に向けて増加する予想をしています。この12月の活動は新聞報道などで情報発信しており、被災地の現状を三重の皆さんに伝えることにもなっており、多くの方に共感していただき、東北の復興を支えることの重要性について理解を得たと考えます。

<福島県南相馬市での活動から得られたこと>

また、今回の活動の帰り道には、福島県南相馬市で語り部の方に被災地を案内いただき、福島への支援について検討する機会を得ました。われわれの会のメンバーは、福島県葛尾村への支援について具体的にスタートしており、全村避難したために大幅に生徒・児童数が減少している小学校と中学校の校歌を録音保存する活動に参加をしています。2015年3月には、葛尾村の皆さんが避難している仮設住宅でのサロン活動を計画しています。また、今回お話を聴かせていただいた南相馬市においてもサロン活動を検討しています。